

東南より母屋をみる。既存住戸のミセ空間を再利用する。



南西より母屋をみる。



南より母屋をみる。



玄関より土間をみる。既存縁側を再利用しアプローチとしている。



農村は、日常「社会と住まい手」によって造られている。継承というその豊かさを踏襲した住まいである。

もう一つは、既存母屋の真壁の柱を好んだ施主の意向を汲み、山北地方の杉材を活用し、コストを考慮したシンプルな構造フレームの表出を提案した。且つ、構造材に限らず、羽柄材と外壁材の全てに県産材を活用し、直ちに大工の工場で加工し組み立て、身近なファブリケーションにより価値のある場を形成している。

令和3年度 第30回建築作品・新潟県賞 優秀賞 TOK205（新潟市）

聖籠 35

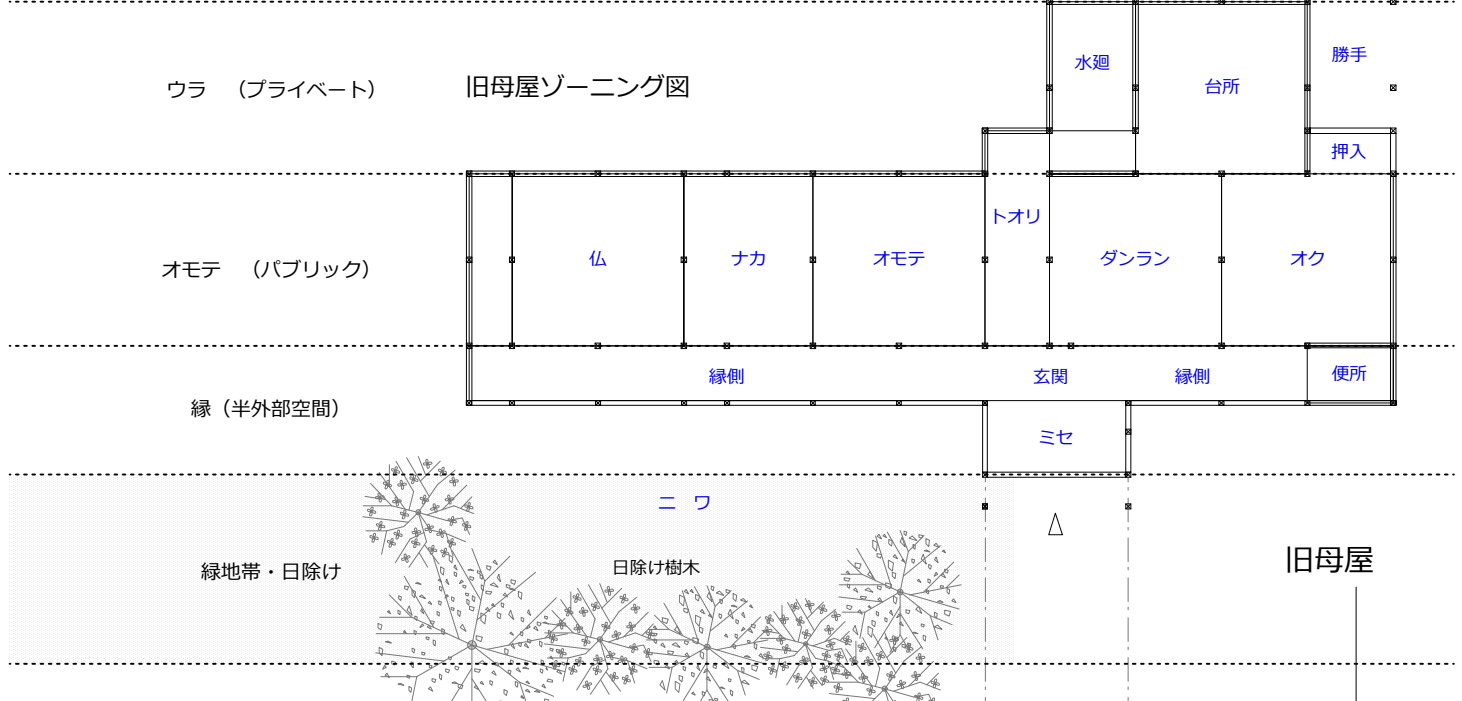
古くから築いた農の文化。建築計画において集落の心底に潜む記憶のネットワークに興味を抱き、観察、分析、インベリションというプロセスを実践している。

一つは集落の母屋の平面構成について、集落の母屋は互いの距離を保つつつ平屋であり太陽に反応して細長の空間を構える傾向にある。興味深い事は、各住戸には玄関を南へ凸に張り出したミセ空間があり、建替に際し、集落内の連鎖空間をあるミセII社交空間を解体せず、アプローチへ転用しつつ移接を交わしこうへを垂れる空間は継続される計画とした。

農村集落における母屋の建て替えである。

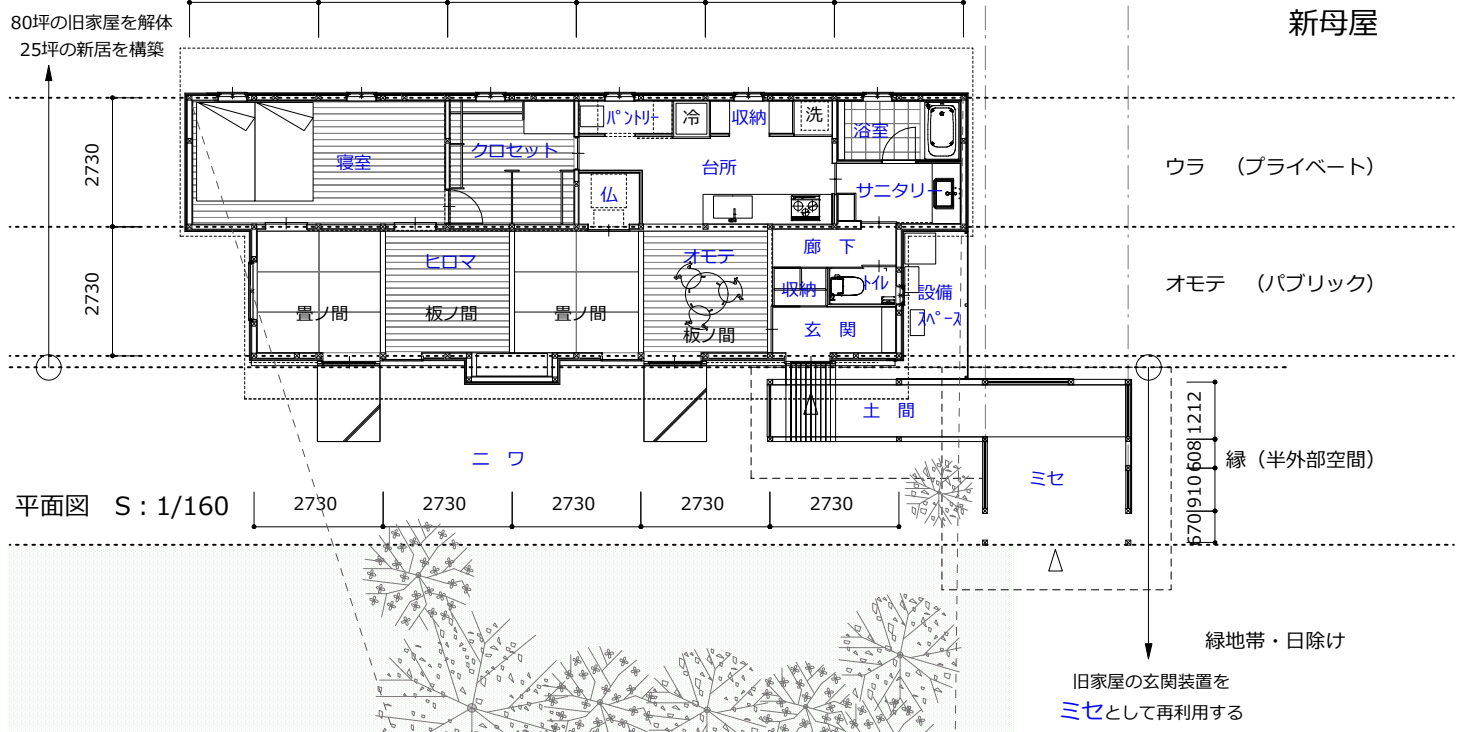
◇新旧母屋の空間領域とゾーニング

母屋は集落の固有性から南に凸な空間を構え、ミセ空間として地域の人々の社交の場として活用されている。建物は、敷地の大きさの恩恵から、東西に長く構えることが可能であり、深い軒を出す。配置構成は南から、日除けの樹木、庭、縁、座敷等のオモテの空間、最後に北にプライベートな空間を配している。



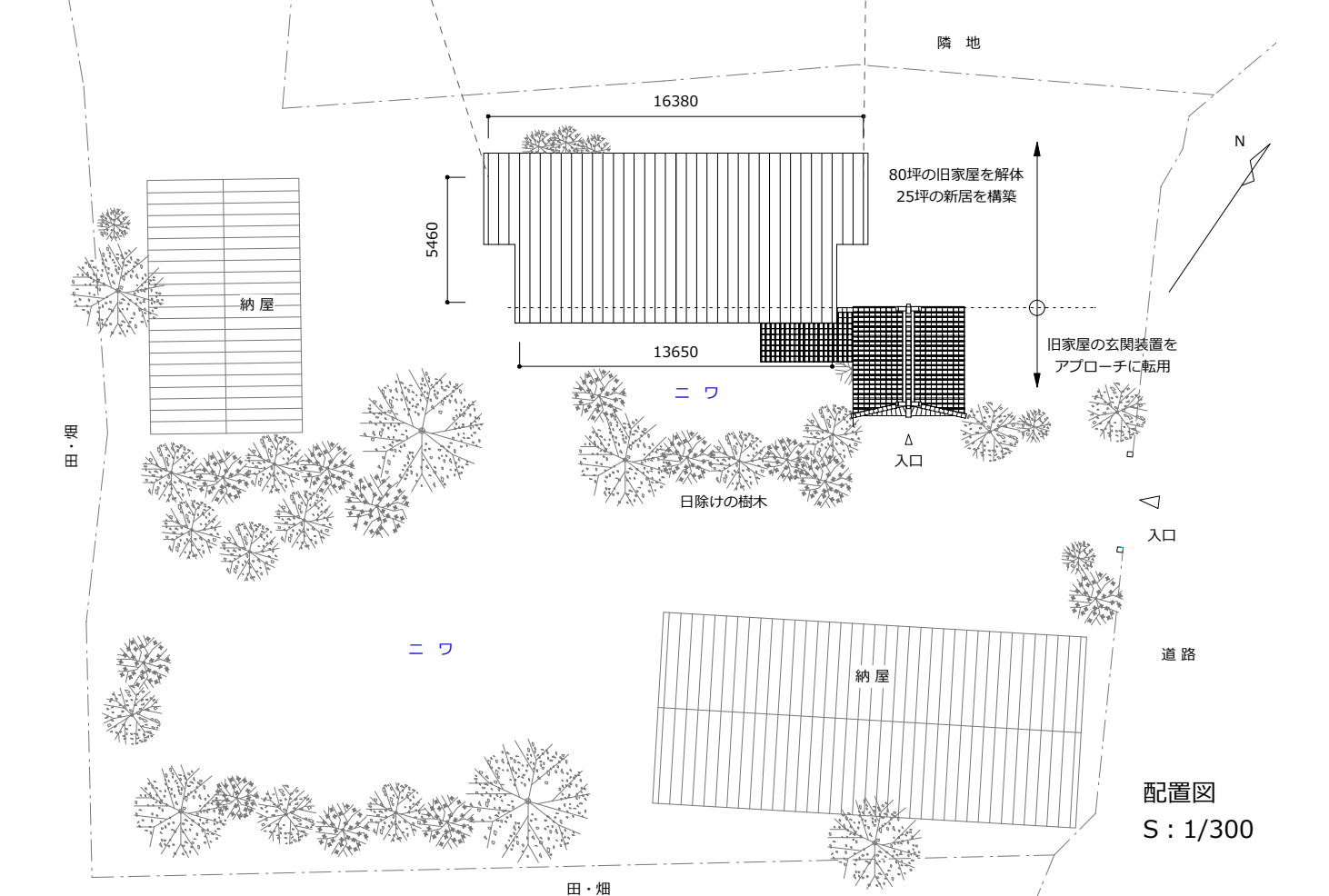
◇平面図、配置図

集落の個性的な平面構成に習い、既存ミセと縁を再利用し、半外部空間のミセを継続した。整った庭と日除けの樹木を再利用する目的で、これらに対峙してオモテ空間を設けた。北側に、寝室、台所、水廻り等のプライベートな領域としている。



◇新旧母屋の空間領域とゾーニング

既存母屋を解体し、一部既存玄関を「ミセ」として再利用している。敷地の北側に新築母屋を計画した。日除けの緑地帯、庭はそのまま活用する



◇身近なファブリケーション

集落を歩くと、いにしえには林業と農業、そして大工が各々の住まいや社寺を手掛けており、なにも建築家だけが空間を担うということではなく、造り手も使い手も、万人が空間構成に関わっていることを伺える。双方が阿吽の呼吸で空間と集落を築いた歴史がある。長年、経済市場の中で汎用されているプレファブリケーションは生産や工程、コストが住まい手の別世界で進捗しがちで、様々な規格、産地の不明、多岐にわたる物が、突如と現場に顔れ組み立てられる。これに相対し、新潟県山北の3.5寸角の木の塊が大工の工場に顔れ、住まい手と建築家が描く草案が、軽量の杉材でシンプルに型取られていく。聖籠の北の地域の木の姿を施主は発見し、集落で感じた「見える化」されたファブリケーションを意識する。「空間は社会や住まい手によって造られる」という身近な感覚を体感する。



◇傾斜トラス

構造は、木造軸組工法として、一般流通材の中で3.5寸角の県産材だけで組み立てた木造住宅である。設計積雪量120cmの多雪区域でありながら1間半(2730mm)スパンに対して方杖を使いながら屋根を支持している。均等スパンの方杖を両側に配置することで柱に大きな応力が生じない様に配慮している。屋根の構造計算からトラス組は桁方向に1365mm間隔となり、表しとなった小屋組が空間に対して程良いリズムとアクセントを創り出している。有り触れた杉材の活用性を探ると共に、調達性と施工性を有効に利用し、新潟県林業の潜在能力と繋がついていく。



オモテとヒロマの上部に3.5寸角のトラスが連なる。

ヒロマをみる。

xキッチンをみる。